

目的 現在の婚礼着は一般に華美な傾向を不しているが、その多くは貸衣裳によつてまがなわれており、儀式着の時代による変化がみられる。尤も、大正期の女子和服婚礼着を調べてその縫製、破り方などについてほぼ半世紀間の変化が考察されたので報告する。

方法 実物、聞きとり、文献等による調査

結果 婚礼着の貸衣裳は、大正期においてすでにみられたが、まだ、個別に調える風潮も多く、仕立ては主として専門職の手にゆだねられていたが、縫製については晴着としての仕立ての外、一部には実用的で簡便な方法もみられ、帯着の延長での仕立てが行なわれていたことも考えられる。また、この度の衣裳には縫製後、そでつけ部分に手直しした痕跡がみられ、着装上の流行として当時みられた、胸高に帯を降めることに対応させたものと考えられる。